

章光堂築100年を記念式典に寄せて

本日ここに、章光堂築100年記念式典が、このように厳かに挙行されますことを、愛媛大学教育学部附属中学校同窓会を代表いたしまして、お慶び申し上げます。

初めて章光堂の建物の中に入りましたのは、入学試験の後、本当の入学許可を得るくじを引くためでした。くじを引く順番を決めるくじを引いたことだけ覚えています。

次に入ったのは、母と一緒に制服のサイズ合わせに来た時でした。古代ギリシャのパルテノン神殿のような柱、木のワックスの香り、大正ロマン漂わせる波打つガラスの窓に圧倒され、これから始まる中学生活に思いを馳せ、希望に胸を膨らませたことを思い出します。

入学式では、この章光堂で、先輩方が「おめでとう おめでとう この感激をいつまでも」と合唱で迎えてくださいました。

クラス対抗合唱コンクールでは、壇上で「子連れ狼」を歌いました。私は大五郎の役で、「ちゃん」というセリフだけでしたが、私の、声変わり前の、可愛らしい、良い声が、この章光堂に心地よく響きました。

少年式では「チビの考えたこと」という題で少年の主張をしました。当時の堀田鶴好校長先生より「身体は小さいけれど、声は一番大きかった」と褒められたことを思い出します。

今年、章光堂が築100周年を迎えるにあたり、自分自身を振り返れば、この章光堂の中で、様々な体験をしたこと、感じたこと、思ったことなどが、脳裏をよぎります。それぞれ時間は心の中に留め置かないと消えてしまふ、今となつては二度と取り返すことのできない貴重な時間でした。

古代ギリシャには、時間を表す言葉が二つあります。クロノスとカイロスです。クロノスは「万人に平等に与えられている物理的な時間」です。章光堂の築100年の100年は、クロノスの時間を表します。それに対し、カイロスというのは、

「人が感じる意義深い質的な時間」をいいます。章光堂の中で、私たち同窓生や、在校生のみなさん、それぞれが、様々な思いを抱いて過ごしました。それがカイロスの時間です。カイロスは「大切な時」であり、「チャンス」でもあり「決定的瞬間」でもあります。

戦国の武将、毛利元就が、宮島に陣を張る陶晴賢（すえはるかた）の大軍に奇襲を決断した時のことです。家臣団と村上水軍は、暴風雨の中で船を出すことに恐れをなし、船を出すことをためらいます。

この時、元就が檣（げき）を飛ばしました。「人間には三つの坂がある。上り坂と下り坂、そしていま一つは『ま坂』という坂じゃ。この『まさか』の時の人の動きが、人を上り坂に押し上げるか、下り坂に突き落とすかを握っておる。今がその『まさか』の時じゃ。この嵐の中、『まさか』攻めては来ないだろうと思う陶と、『まさか』を突くこの毛利。皆々の心配はもつともなれど、初めから船が沈むと決めてかかる

事はない。先々起こるかも知れぬ不幸ばかりを考えておつては、その事の方が不幸じゃ。この嵐ならば、陶も恐らく油断しておろう。我らはそこを突くのじゃ」と、風雨強まる中、闇に紛れて毛利軍は船を出します。奇襲の結果、毛利軍はたった4千の兵で、陶晴賢2万の大軍を打ち破ったのです。

毛利元就にとって、この「まさか」の 때가、カイロスの時だったのです。目の前にきたあらゆる機会をとらえて、断固として善処する人、これが世にいう成功者です。カイロスの時を生きた元就は、その後の運命を上り坂に変えました。

この章光堂で、私は中学生の時に、何度か、「カイロスの時」に出会えました。また、本日の記念式典で、「章光堂の歴史」を解説してくださる中城康圓さんが、ご先祖様を4代遡って、新しい親戚とわかった、すばらしい出会いも、カイロスの時だった、と章光堂に感謝しております。

在校生の皆さん、本日の記念式典をきっかけに、もう一度自分の時間を見つめ直してください。人生の砂時計の砂が、

漫然と下に落ちていく、クロノスの時間に生きるのではなく、砂時計の砂を宝石の粒に変化させて、今の貴重な青春時代に、カイロスの時を生きてください。

この章光堂に集った、旧制松山高等学校の学生が、競い合って読んだ「愛と認識の出発」の著者、倉田百三は、「青春は短い。宝石のごとくにそれを惜しめ」と言っています。

ささやかな喜びの瞬間ほど見逃しやすく、過ぎやすく、取り返しのつかないものではありません。日々の暮らしの中で、身の回りに絶えず起こっては、消えていく、さまざま瞬間を、逃がさずつかまえ、注意を向け、深く味わうことこそが、カイロスの時を生きることになる、ということを申し上げ、みなさんのこれからの人生が、喜びにあふれ、実りあるものになりますことを祈念いたしまして、章光堂築100周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

令和4年2月14日

愛媛大学教育学部附属中学校同窓会会長 中城 敏